

---

# 旅の星月夜 ～美しくあるもの～

りおぼん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅の星月夜 ～美しくあるもの～

### 【Nコード】

N4646D

### 【作者名】

りおぼん

### 【あらすじ】

ある谷に住んでいた少年アルハは、「美しいもの」を探すために、旅に出ることを決意する。彼は旅の中でいろいろなものと出会い、たくさんの経験をし、大きく成長していく……。感動あり、笑いあり、恋愛もあり！？人間としての在り方を考えさせられる、小さくて大きな物語です。

## プロローグ：始まりはこの日

雪は溶け、自然が初春を迎え始めたころ、谷には緑の草原が広がっていた。初春といってもまだまだ肌寒く、草丈もそれほど高くは無い。

その草原の中にちょこんと一つ、屋根一面の枯れ草を生やした古屋があった。古屋は、澄んだ空気や、ただ風だけが吹きぬける草原の中にあるせいか、とてもわびしく見える。こんな陰気なところに誰が隠棲しているのか、と聞きたくなるが、ここに在住する隠者はこのわびしい雰囲気を裏切る活発な者である。

ちょうど今、その者が戸を開け、草原に飛び出してきたところだった。

「今日はいつになくあったかいなあ！」

少年は二つと笑って独り言を言った。とても揚々とした声だ。

彼の名はアルハ。いつもニツコリお元気な性格の、十五歳の少年である。髪は綺麗にまとまった黒をしており、長さは耳を過ぎるくらいで、長くもなく細くもないちょうど中間くらいだ。顔は目がくりくりして大きいのが特徴で、全体的に柔和な顔立ちをしている。体格はすつくと締まった身体と、この年代にしてはそこそこ高い、百七十センチ過ぎの身長が印象的だ。服装は素朴な感じの旅人の服で、茶色い衣を羽織っている。また、胸につけた透明色の宝石のペンダントが特徴だ。

アルハは大きく伸びをした。静かな風が髪をなでる。彼は青空を見上げ、次に古屋を見つめた。古屋はいつ見てもオンボロで、でもいつ見ても懐かしみのある寂然とした建物だ。

アルハは微笑みかけるように古屋を眺め、こう呟いた。

「お前とは今日でお別れだ。母さんも、今日でお別れだ。次会うときは何年後になるかわからないけど、それまでに潰れたりなんかすんなよ！」

そしてにっこりと笑った。

これは、アルハが旅をして出会った数々の物語である……

プロローグ：始まりはこの日（後書き）

次章より本編

## 第一章：哀眼の少女

「きゃあっ！」

学校の裏庭で、ボロ衣の少女が三人の少年に突き飛ばされた。

頭を手で覆って震える少女を少年たちはあざ笑った。

「あひゃひゃひゃひゃ！ 見るこの無様な姿っ！」

金髪の少年が指を刺して言った。少女は涙を流して哀願する。

「お願いです……やめてください……私は、私は」

「奴隷のくせに調子に乗るな！」

少年のうちの一人が、少女の髪の毛をつかんだ。

「いやあああ！」

「静かにしやがれ、この奴隷野郎」

そういうと少年は少女の頬を引っばたく。

「ヒッグ……ッグ……」

声をおさえているが、やはり涙は止まらない。そんな姿を見た三人は、ついに爆笑してしまった。

「おいエイナ、お前は奴隷だ。だから俺たちに反抗することは許さない。今から三回、私はみじめな奴隷です、と言え。さあ、早く！」  
「……」

怯えた様子で少年を見つめる少女      エイナに、もう一人の少年が怒鳴った。

「言うんだ！ このクズ」

そしてまた頬をはたく。エイナは地面に倒れてしまった。

エイナはポロポロと涙を流しながら、苦しそうに呟いた。

「私はみじめな奴隷です。私はみじめな奴隷です。私はみじめな奴隷です。」

隷です……」

ヒッグヒッグと泣きながら、提唱するように言った。少年たちは満足したのか、二つと怖い笑みを浮かべて、顔を覗き込んだ。

「よろしい、よくできました」

そして金髪の少年はとなりの二人に呼びかける。

「おい、そろそろ授業がはじまるぞ！ 急いで教室に戻ろう」

三人はゆっくりとその場を去っていった。

## 第一章：哀眼の少女（後書き）

注意書き。

この物語は、「第 章：                   」という形でその章のプロローグ的なものをし、次に「（                   ）」：                   「                   」というふうな形で進行していきます。でも普通に読んでいれば何ら支障はないので、大丈夫だと思います。

また、ジャンルを「冒険」から「ファンタジー」に変更しました。色々なところを旅するという意味ではまた別のジャンルになるかと思われませんが、少し非現実的要素（たとえば天使とか）を加えようという予定でして、ファンタジーにしようと思います。



## (1)：旅立ちの日に

アルハはまた空を見上げた。ちぎれ雲がふわりと空を浮遊している。アルハは、これからいろんな空を見ていくんだと考えると、胸がわくわくした。

アルハは今日、この谷を発つ。十五年間、まるで家族のような存在だったこの谷と別れを告げ、旅に出るのだ。

彼はいったん古屋に戻り、出発の準備を始めた。準備といっても、いろいろと詰め込んだ麻袋を持ち、ナイフと短剣を身につけるだけだ。もちろん短剣は護身用で、決して果物を剥くためのものではない。

古屋の中は、蔓<sup>つる</sup>や枯れ草が天井まで生えそむいていて、いかにも数年間、何の手入れもされていなかったということが感じられる。右隅には木のベッドがあり、しかしその上には毛布が敷かれていなかった。何から何までの始末をし、しばらく帰郷することはないと語りかけているようだ。

中に何か入った麻袋を手にしたアルハは、戸の前に立ち、部屋に向き直った。無頓着で大雑把な彼でも、やはり数年間お世話になった古屋を離れるのは寂しいものである。彼は少し微笑み、どこかの寂しげな表情で室内を見つめていた。

しかし数秒もすると、へへっと笑って古屋を出た。眺めは性に合わないのか、思い出を振り返る時間をつくらない。彼は古屋を出た後、草原の奥にある小さな花畑に向かった。

草原の緩やかな上り坂をのぼった先の、突き当りのところにそれはある。白い岩壁に囲まれた、蝶の舞う優しい場所だ。そこには数年前、嵐の去った翌日に立てた十字架がひっそりと空を向いている。その十字架の下には、アルハを女手一つで育てた母が眠っているのだ。

出発間際にその十字架のもとへ向かおうとするアルハの心には、今まで大切に自分を育ててくれた感謝の気持ちと、別れに対するたくさんの想いがあった。

そしてアルハは、きっと空にいる母への祈りと、もう一人で旅ができるほど立派に成長したということの報告を済ませてこそ、やっと旅ができるのだと信じていた。

やがて坂を上り終えたころ、色とりどりの花が広がる小さな円形の広場に出た。そこには紋白蝶が二匹、ひらひらと羽をなびかせながら遊んでいた。いつ見ても優しい場所で、そして静かな場所である。

その花畑の中心には、空に向かって立つ十字架があった。十字架の足元は土で固定し、倒れないようにされている。その固定した土の上には、花畑の花を三束だけちょこんと置いてあり、優しい光に包まれていた。

「やっぱこの場所は最高だよな、母さん」

アルハは十字架に向き直り、小さな微笑みを浮かべた。まるで本当にそこに母がいるかのような口調で語りかけていた。いや、彼からすれば、この優しい場所に確かに母はいるのだろう。

「母さん、覚えてる？ 俺がまだ、やっと言葉を話せるようになってたくらいのころ、母さんが俺にすごく綺麗な海を見せてくれたこ

と」

生まれて初めて見た、すごく綺麗な海。あのときの感動と、あの一面の青い映像は今でも鮮明に覚えている。今でも大切な思い出の一つとなって、心の中に生き続けているのだ。

「俺はあのととき、初めて世界が美しいと思えたんだ。母さんはあの海の美しさをどう解釈したのかはわからないけど、俺はあの海が世界の魅力の一つなんだと思った。だから……」

アルハはそこで言葉を切った。そして、十字架に背を向けると、眼前に広がる大きな草原を眺めた。

「俺はもつともつとたくさん、美しいものを見たいと思ったんだ。そして、美しいものの数だけの解釈をしたい。だから、俺は今日、母さんに別れを言いにきた」

アルハはずっと微笑んでいた。その表情からは、悲しみを感じていないわけでもなく、本当に前だけを向いている彼の凛々しい姿があった。

「母さん、俺、もう大丈夫だからな！　今までありがとう！　じゃ、またなっ！」

地平線の先にある世界を目指して、彼は歩き出した……。

## （２）：谷を抜けた日

アルハは谷に広がる草原を歩いた。

谷は間道と草原と、それを取り囲む岩壁でできていて、一般の谷と比べると大きい。外界とは谷川を挟んでおり、小さく古い吊り橋で繋がっている。谷川には川淀と呼ばれるところがなく、常に急流。また、この谷は世間から隔絶された環境にあるため、ここに生息する動物は珍種なものが多い。しかし、もともと珍種な動物を普通の動物と思っているアルハには、そもそも外界の動物こそが珍種なのだが。

さきほど地平線の先という言葉を口にしたが、実は言つと、それは小高い場所で見ることが出来ないようになっていて。というのは、これもさきほど述べたが、岩壁が邪魔になって視界が遮られているからだ。したがって今、アルハの目からは草原と岩壁と美空しか見ることが出来ない。ま、見えなくともさほど問題というわけではないが、あの壁の向こうに何があるのだろうと考えると、期待に胸が膨らむというものだ。

肌に涼しいくらいの風が、草原をさまよっている。そしてそれに揺られたアルハの衣の影が草原の上で踊っていた。アルハは自然の心地よさに身を任せながら、ただ眼前に聳え立つ岩壁へと歩いていた。

いろいろなものを感傷しているうちに、アルハはようやく岩壁の手前まで来ていた。岩壁は職人の手で削られたかのように白く滑らかな表面で、上下左右大きく広がっている。かつて一度だけ外界に

出たときの記憶では、この岩壁にぶち当たったときは岩壁に沿って右に進めば間道に抜けられる。アルハは岩壁を高く見上げた後、すぐに右に曲がって歩き始めた。

視界の左側は岩壁、前方と右側が草原しか見えない。ふと空を見上げると、大きな雲が、さきほどのちぎれ雲を探してさまよっていた。

やがてアルハは、岩壁が綺麗に真っ二つに割れた大きな岩間を見つけた。岩間の中は、太陽の光が遮られていて少し暗く、岩によってできた自然の階段があった。自然の階段は段差が大きく、頂上まで登ると岩壁の屋根が見えそうなくらいである。侵食によってこのような道ができたのかは定かでないが、不思議なことにこの岩間の岩壁も表面が滑らかであった。これが間道である。

アルハは頂上を見上げた後、岩の階段を登り始めた。いくら無神経なアルハといえども、こればかりは慎重である。なにしろ、岩が滑りやすい故に足を滑らせて捻挫やその他怪我等を負ってしまい旅を中断するなどということにもなりかねないからだ。

太陽の光を受けない岩壁は、とても冷たかった。そして、前方からはビュービューと風が吹き込んできていた。アルハは全身を激しく揺られ、髪を避けながらゆっくりと岩を登っていった。やがて頂上の岩の上に立ち上がったとき、岩間の向こうが少しだけ開けた。まず眼下には階段が広がっており、左右には相変わらずの岩壁、そして前方には、この谷（世間では第三の谷と呼ばれている）と外側の谷（第二の谷）とを繋ぐ吊り橋があった。この吊り橋は、何百年もこの二つの谷を繋いでおり、もうボロボロで今にも谷底へ落ちてしまいそうである。だが、この吊り橋はもう殆ど使われておらず、今は自然の橋（もともと第二の谷と第三の谷は陸続き）を渡って渡

られることが多い。なぜなら、道幅こそ吊り橋と変わらないものの、吊り橋ほど揺れず、さらに頑丈であるからである。近代は石造りのアーチと呼ばれる洋風の橋がつくられてきているが、この谷の橋はまるで見捨てられたかのように数百年放ったらかしである。ま、こんな大自然の中にアーチだなんてものも逆に滑稽であろうが。

登るときは慎重だったアルハも、降りるときはピョンピョンとカエルみたいに飛び降りていった。そもそも彼は野生児なので、飛んだり跳ねたり、川を泳いだり木に登ったりするのが普通なのだ。やがてアルハは橋の前に立ち、オンボロ橋にため息をついた。

「ここは危ないから、あっちの道を通りましょう」  
以前、母にこう言われたのを思い出した。ちょうどこの橋の前で、以前はここを右に曲がって自然の橋を渡ったような気がする。アルハは記憶がままに右に曲がり、記憶の中にぼんやり映る自然の橋の前に立った。

自然の橋は、オンボロ橋と同じくらいのだ幅な上に手すりがないかった。昔、母に手を引かれ、震えながら通ったのを覚えている。今考えれば何故震えたのかさえ疑問だが、おそらくあのときは怖かったのである。谷底へ真つ逆さま、なんて本気で考えていたからだ。

アルハは目を細くして、脚をドカドカ拳げながら前へと進んだ。まったく、無神経というのはこういうやつのことを言うのである。

そんなこんなで、アルハはようやく第一の谷、谷と外界を結ぶ大きな吊り橋の前へと出た。そのころにはもう、あたりは夕焼けに包まれており、そしてほのかに暗くなっていた。

この橋の前に立ったとき、急にアルハの脳裏に不思議な光景が映し出された。大きな橋を、母と一緒に渡った光景。いやそれよりも、母の言った言葉が鮮明に思い出された。

「この橋の先にはね、あなたの知らない世界がたくさんあるのよ」  
母の優しい声。対する無邪気な自分の声。

「え？ほんと？　どんなどんな？」

このころの自分は谷の外の世界のことなど知りもしなかった。そもそも、谷の外に世界があるということさえも知らなかったのだ。

「たとえばね……」

高台から水を落とす滝、月明かりに照らされた湖、太陽の木漏れ日を撒き散らす森、人々にぎわう港町、そして、浜から見られる大きな海。

「へえ……凄いだね！」

このときは単に凄いとは思わなかった。でも今なら、あのときの言葉がいろんな意味を持っていたように思える。現に今、その言葉の意味のおかげで、旅をする理由にもなっている。また、母は自分以上にいろいろな場所を訪れたのだということがわかった。もしかすると、母も自分みたいに青少年時代に世界の神秘にあこがれていろんな世界を旅して周ったのかもしれない。

「あとは……そうね、小高い丘の上から見ると、星月夜が綺麗だったわ」

母はこうも言った。そのときの顔は思い出にふけていて、よほど綺麗だったのだと感ずることが出来た。

アルハは橋を渡り始めた。遙か眼下には谷川が流れており、ところどころ岩に跳ねて水しぶきを撒き散らしていた。谷の入り口とも

いえるこの橋はまるで頑丈で、アルハが通ったところで揺れもしないし、足場もトントンといった音が響いた。

やがて彼は、橋を抜け、果てしなく続く大地へと向き立った……



(2) : 谷を抜けた日(後書き)

第一の谷、第二の谷……と、続き、全部で第五まであります。第五の谷を中心にして、第四、第三と同心円状に広がっており、それぞれを繋ぐの是一本の橋だけです。もちろん、山ではなく谷であるため、第五の谷が一番高い、とかそんなことはありません。

また、お察しのとおり、自然感傷が多いです。これからいろんなところを描写していこうと思いますので、応援よろしくお願いします

### (3) : 最初の村

果てしなく広がる平原を、アルハは何日も何日も歩き続けた。

途中にいろいろな発見があった。土を被って這いすみ、たまにひょいと顔を出すモグラ、頭上を楽しそうに飛ぶ小鳥、大きな黄色い目で、近づくとも一目散に逃げてしまう猫、どれもこれも谷では見ることができなかった生物ばかりで、アルハはすごいすごいと連呼していた。でもよくよく考えれば、これは懐かしい思い出の一つで、決して初めて見るものたちではない。

また雨の日は、雨宿りをする場所に困らされた。最初の雨は近くに雨除けにちょうどいい木があったため、その下で一晩を過ごしたが、二回目の雨はさすがに運の果て、雨に打たれて一晩歩き続けるはめになってしまった。幸いアルハは風邪も引かず、水を弾く特性の旅人服に身を纏っていたため、その点では後日それほど引きずることはなかったが、足首はドロドロに汚れていて、それに靴はグニヤグニヤになっていた。こんな状態で旅を続けるなど、危険かどうかはさておき気持ちが悪いものである。

アルハはおそらく旅の途中、母が見たであろう星月夜を毎日探してみた。無論、平原の空は、視界が固定された谷の空とは違うので、毎回変化して綺麗であった。星のしずくが地上で活動しているものたちに力を与えているようで、一つ一つの輝きが心地よい気分にさせてくれる。しかし、母がかつて見た星月夜とは、こんなものだったのだろうか。アルハはふと思う。あれだけ綺麗で雄大な海と、それに引けをとらない大自然の数々よりも、目を輝かせ思い出にひたるような星月夜は、こんなものであるはずがない。たしかに綺麗なのだが、きつとこんなものではないだろう。

そんな答えを出して数日、アルハは母の見た星月夜について考えることは無かった。

平原を歩き始めて十日後、とうとう食料が尽きてしまった。というわけでこの日からは平原に生息する動物を狩って空腹を凌がなければならぬ。といっても、アルハにとってはやっとこさ谷の生活が戻ってきたような感覚で、獲物を捕るなど何の雑作もなかった。捕った獲物は血抜きをして火で焼く。ある程度焼けたのを確認すれば、それを口に放り込む。ただそれだけだ。

十五日後、アルハは平原を流れる浅い川を見つけた。ちょうどそのころ、彼の手持ちの水が無くなってしまったため、水分の補充にタイミングがよかった。アルハは川の水を手ですくい顔を洗う。ひさびさに澄んだ水を浴びたようで、とても気持ちよかった。最後にアルハは川の水を少しだけ飲み、気が済んだところで川を渡った。

二十日後、道なき平原をさまよっているうちに、ようやく旅を始めて最初の「村」を見つけた。アルハは小高い丘の上にたち、眼下にひっそりと横たわる小さな村に目をやった。村は大きな建物が二つと、藁の家が数件、ため池、放牧中の動物などが見受けられる。また、村の中で活動する老若男女の姿が見えた。

アルハは小高い丘の澄んだ空気をスーッと吸い込んだ後、眼下に横たわる小さな村へと歩み始めた。

(3) : 最初の村(後書き)

いよいよ最初の村へと到着しました！  
最近忙しくて、更新が遅れ気味になりますが、頑張っ  
て続けていこうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4646d/>

---

旅の星月夜　～美しくあるもの～

2010年10月10日04時19分発行